

Title	メゾコスモスとしての庭園都市： ヘルダーリンの悲歌「シュトゥットガルト」における家族の形態
Sub Title	Dre Garten-Stadt als Mezzokosmos- Zur Form eiver Familre in Hölderling Elegi "Stutgard"
Author	大塚, 直(Otsuka, Sunao)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1996
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.71, (1996. 12) ,p.227(36)- 247(16)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00710001-0247

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

メゾコスモスとしての庭園都市

ヘルダーリンの悲歌「シュトゥットガルト」における家族の形態

大 塚 直

序

ヘルダーリンの初の全集（1843）を編纂した Chr. Th. シュヴァーブは、その最初の評伝「ヘルダーリンの生涯」の作者でもあった⁽¹⁾。その伝記の草稿段階において彼は感慨深げに、詩人の故郷を優れて描出した作品として悲歌「シュトゥットガルト」からの次の部分を引用していた⁽²⁾。

[...] そこでは わたしの愛しい生誕の地と
河なかのあの島とが 青き水瀬に洗われゆく。
両岸にひろがるこの地は わたしにとって聖なるものだ、あの岩は
また、
緑なす庭園と家屋を支え 幾多の波間に峙っている。(V. 39-42)⁽³⁾

「シュトゥットガルト」は詩友ジークフリート・シュミット（1774-1859）を祖国の「祝祭」に招待するヘルダーリンの献呈詩である。作品の冒頭部（第1・2詩節）では秋の日を迎えたシュトゥットガルトの地から、ヴュルテムベルク公国の北の境に位置するラウフェンへと詩人が友を迎えに行く道程が描かれる。そして中間部（第3・4詩節）における友との再会に際して、詩人は上のように歌うのである。ラウフェンとはまた詩人の生地でもあった。そして詩人とシュミットとの散策は始まり、終結部（第5・6詩節）において両者はシュトゥットガルトに到着する。しかし「祝祭」は催されない。この作品そのものがヘルダーリンの「夢」（V. 106）

に過ぎないことが最後に明らかとなる。

「シュトゥットガルト」全体を考察した際に顕著であるのは、この時期以降の詩作において決定的な意味を担ってゆく「祝祭」のモチーフ、及び父なるエーテル、母なる大地、そして詩人としての息子の三者から成り立つ「家族」のモチーフである。「故郷」「祝祭」「家族」のモチーフはそのいずれもがエレギー（悲歌）期における詩人の世界観をうかがい知るうえで興味深い一種の「新しき神話」であるのみならず、作品のなかでは相互補完的に、近代における存在の確固たる地盤を求めてプログラムの展開されてゆく。また上の詩の引用に際しては、詩人の「故郷」が「島」(V. 40)「庭園」(V. 42)「家屋」(V. 42)の語彙でもって名指されたことを確認したい。殊に「庭園」の語は、作品全体を通じてわずかに三度用いられるに過ぎないが(V. 3, 42, 70)、その語の表出するヴィジョンは詩人の望む祖国の「祝祭」とも密接なつながりを持つように思われる。結論から述べれば、本作品においてシュトゥットガルトはディオニュソスの「庭園」として現前する。それは新しき神話「家族」の形態のもとに、分裂をもたらすモデルネの原理を超克した理想の共同体のヴィジョンとして現出している。本論の目的は、このように詩人の唱える新しき神話としての「家族」の形態を詩作品に即して分析することにより、新しき詩人の園としての「シュトゥットガルト」を位置づけることにある。

1. 「シュトゥットガルト」の研究史

成立史は、C. ハムリンの著述(1970)に詳しい⁽⁴⁾。以下はハムリンの記述の要約である。本作品は、戦線からフリートベルク(Friedberg in der Wetterau)へ帰郷する詩友シュミットへの献呈を念頭に、1800年の秋から冬にかけてシュトゥットガルトで成立したものである。当時の覚え書きに「ジークフリート・シュミットに捧ぐ/無事の帰還を祝して」(An Siegfried Schmid/ Willkom nach dem Kriege)とあることから、1800年の初頭にはすでに詩想が熟していたと考えられる。(シュミットは1800年4月15日退役、7月までウィーン滞在後、帰郷。詩人との間には1800年頃か

ら往復書簡が交わされる。)以後、推敲を重ねつつ後世には三種類の草稿が伝えられているが、最も初期のものはシュテファン・ツヴァイクが遺産として残した、いわゆるロンドン草稿(H₂)である。これは1801年初頭ハウプトヴィルにて書かれたと推測される。最初の決定稿(H₁)を詩人が執筆したのは、ハウプトヴィルからニュルティンゲンへの帰郷の後、1801年春のこととされる。これは悲歌「帰郷」や「パンと葡萄酒」とともに小さな束にまとめられていたが、現在ではわずかに最終5行が保持されているに過ぎない。シュトゥットガルト版のテキストの底本ともなっている第三の草稿(H₃)は、ホンブルク二つ折りノートに記載されていた。これは後期讃歌「唯一者」や「パトモス」とともに清書されていることから、1802/3年の冬に成立したのではないかと考えられている。これら三種類の草稿を比べてみると、語彙のわずかな変更が認められるに過ぎないが、1804年の春に手を加えられた更なる改稿(H_{3a})においては、第三稿に大幅な書き替えが行われている。それは殊に第3詩節、第4詩節において著しい⁽⁵⁾。

この改稿を基にして、「シュトゥットガルト」はレオ・フォン・ゼッケンドルフの編集する『1807年詩神年鑑』に初めて掲載された。しかしながら、その際表題は「秋の祝祭」(Die Herbstfeier)に変えられている。それが詩人の意図によるものであるか、それとも編者による一方的な改題であるのか、今日、確定は難しい。作品に対し書評が残されているが、アマデウス・ヴェント(Amadeus Wendt)は「詩人が完全に古代詩の異質な世界や言葉に生きているがゆえに、その表現はあまりにあいまいになりがちである。」⁽⁶⁾と評し、「殊に悲歌『秋の祝祭』は叙述の明晰さに欠ける」⁽⁷⁾こと、また「奇妙な表現がときおり目に付く」⁽⁸⁾ことを述べている。おそらく当時は、個別性を排除し普遍的なものを追求してゆくシラーの古典主義が文壇に支配的であり⁽⁹⁾、都市や個人の個別的名称を作品のなかに描出してゆくヘルダーリンのエレギーの手法は⁽¹⁰⁾、読者に疎んじられたのかもしれない。すでに精神を病む詩人は、いずれにせよ自分の作品の掲載について何一つ知ることはなかったという⁽¹¹⁾。

Fr. バイスナーは、ヘルダーリンのエレギーの特色を『ドイツ・エレギー史』(1940)、また「エレギー断片『野外へ』の解釈」(1943)のなかで詳細に論じている⁽¹²⁾。頻出する ich や du 及び地名や人名の指摘、さらにアレゴリーやミュートスをめぐる詩学的考察、ピンダロスやホラチウスの讃歌構造分析による句読・詩型上の検討、さらに「喜びの祝祭」「神々の顕現」「想起を通じてのより高次の理想領域への止揚」といったモチーフ分析等は、今日作品解釈の礎石として欠くことは出来まい。また同様のエレギー全般にわたる指摘を J. シュミットが行っており (1968)⁽¹³⁾、後期讃歌への移行を射程に入れた詩人の文体分析には見るべきものがある。殊に、作品導入部の祝祭性への指摘は鋭い。しかしながら、ロンドン草稿のファクシミリ化とともに「シュトゥットガルト」そのものを対象として、初めて本格的な検討を加えたのが C. ハムリンであった (1970)⁽¹⁴⁾。ハムリンは作品内の諸主題、例えば「さすらい」「バックスの要素」「喜ばしき詩神の都市」としてのシュトゥットガルトを指摘し、また詩の構造が後期ヘルダーリンにおいて顕著なトリアーデ (3の倍数構造) という法則的計測に基づいてはじめて詩作されたことを述べる。さらにこの「秋の祝祭」が催されるのは単に詩人の表象内に過ぎぬとする決定的な解釈を施している。

1974年の高橋輝暁による解釈学的分析 (Eine hermeneutische Auslegung)⁽¹⁵⁾は、H. G. ガーダマーの手法に倣い全詩節の構造を詳細に論じた労作である。主に時間と空間の視点が目を引く。同氏はまた1978年に、P. ベルトーに触発された政治的・社会的解釈を本詩に施してもいる⁽¹⁶⁾。

1982年には三冊の研究書が出版された。A. ザイフェルトは本作品とピンダロスとの比較検討を通じて⁽¹⁷⁾、「シュトゥットガルト」と彼の第12ピュティア競技頌歌との著しい類縁性を指摘している。殊に古代における都市賞賛のトポスがシュトゥットガルトになぞられていること、詩人が母なるものとして都市を称揚する背景に、ギリシア諸都市に対するピンダロスとの同様の心性があることを明らかにしている。また「無事の帰還を祝し

て」本詩が献呈された詩友シュミットに対する詩人の出迎え（V. 38-39）を、古代競技勝利者の祖国への凱旋、祝祭への道程として解釈している。S. ヴァクヴィッツは詩人のホンブルク期における哲学的断片「滅びのなかで生まれるもの」（1798/99）を主な根拠として、「エレギーとはすでに理想となってしまった過去と実在としての現実とを明確な距離を保ちつつ媒介してゆくジャンルである」⁽¹⁸⁾と位置づけ、その理論の具象的な実作として「シュトゥットガルト」を解釈しようとする⁽¹⁹⁾。ここでは上述のエレギー理論に基づく過去と現実との融和をより一層堅固にする神話的形姿としての「ディオニュソス」が考察される。だがこのような論証はあまりに図式的と言うべきだろう。R. ツーバビューラーは本詩の「献呈詩」としての性格を強調し⁽²⁰⁾、シュトゥットガルトでの友人との「対話」や連れ立っての「さすらい」を通じて、個の領域から祖国・共同体の領域へと次第にパトスが高揚してゆくと指摘している。またエーテル、大地、詩人、祖国の英雄たちといった詩人のモチーフを詳細に論じている。

F. マルティーニの論考（1988）⁽²¹⁾は二部構成を採り、第Ⅰ部ではP. ベルトーに倣った伝記的政治的考察を行い、第Ⅱ部ではW. ビンダーに倣った詩作・神学・哲学上の考察を加える。また彼はヘルダーリンのシュトゥットガルト観の推移を次のように指摘している。すなわち、1）政治的抑圧を被る絶対王制下の首府としてのマイナス・イメージにはじまり、2）ランダウアー・クライス⁽²²⁾との友愛や出版をも含め詩人の文学活動を支える「歌人の都市」としてのポジティブな評価を経て、3）最終的には安らぎを与えてくれる「自らの死に場所」としての都市観へ移行してゆく。さらに詩人においては、シュトゥットガルトが常に異郷へ旅立つ際の「門」として機能していたことに注目したい。

最後に、B. ベッセンシュタインの論考（1996）⁽²³⁾に触れておきたい。ここで注目すべきは、「母」及び「大地」のモチーフを「歌の受領者」として、すなわち「乏しき夜の時代」にあって不在とされる天上の「父」の代理者として位置づけていることである⁽²⁴⁾。確かに以前の『ヒュペリオン』執筆期の汎神論的世界観や、後の後期讃歌における唯一神的傾向

に比較すれば、このエレギー期の作品にみられる家族的形態において「母なる大地」は「自然」そのものに通じ、独自の機能を担っているように思える。こうした「母なる大地」の理解の背景には、無論ギリシア神話において「神々の母」とされる大地母神ガイアの影響もあろう⁽²⁵⁾。

2. 「シュトゥットガルト」における家族の形態

a) 詩人としての息子——ディオニュソスとは誰であるのか

多くの研究者が本作品においてディオニュソスのモチーフを指摘している。B. ベッセンシュタインは、ヘルダーリンのディオニュソス像に寄せて「変革」「炎」「根源」「文化」「大地」「植物の生育」「歓喜」「宥和」「制覇」等の幾つもの属性を検討しつつ、新しき共同体樹立に向かう「革命の神」としての側面を強調しているが⁽²⁶⁾、こうした「いままでの一切を恥じ入らせるような志向や考え方の革命」⁽²⁷⁾を打ち立てようとしているのは誰であるのか、従来の解釈はその考察をなおざりにしてきたように思われる。もっとも本詩に即して考えた場合、このディオニュソス的な「秋の祝祭」を望んでいるのは誰であるのか、あまりに明白なようにも思われる。ディオニュソスとは詩人を意味しているのである。

詩人とディオニュソスとがヘルダーリンの作品において初めて比較検討されるのは、「我らが偉大なる詩人たちに寄す」(1798)においてのことであった。

おお 呼び起こせ、おんみら詩人たちよ！ 今なお眠りにつく人々を、

そのまどろみから呼び起こすのだ、掟を与えよ、我らに

生命を与えよ、制覇せよ、半神たち！ ただおんみらのみが

民を統べる権能を有しているのだ、かのバッカス神のように。(StA.

I. 261. V. 5-8)

ここでは詩人とバッカスが等置されている。詩人もまたディオニュソス

の属性を有するべきであるという。古代文芸（例えばホラチウス）においてディオニュソスとは「詩人の神」をも意味しているが⁽²⁸⁾、ヘルダーリンにおいては詩人そのものの場合がある、このような解釈は可能であろう（例えば、ベッシェンシュタインは後期讃歌「ライン」第10詩節におけるルソー＝ディオニュソスの図式を指摘し、「追想」においては詩的主体の「開拓」(Kolonisierung) への船旅にディオニュソスを見ている)⁽²⁹⁾。また、神々の不在とされるこの「夜」(V. 24, 62, 87, 97) の時にあって現前する「共同の神」(V. 31) デイオニュソスとは、詩人存在以外にその対象を考えることは出来まい。そして殊に本詩「シュトゥットガルト」においては、このディオニュソスの祭りのうちに詩人を暗示させるモチーフが頻出しているように思える。例えば、冒頭部に登場し「歌の国」を築く小鳥たち (V. 5-12)、中間部のかつて祖国を切り拓いた中世の英雄たち (V. 49-51) 及び山々から生まれ出づる新しき小川たち (V. 59-62)、終結部において最終的にその出現が待望される祖国の天使たち (V. 85-96) 等である。これらは全て詩人のディオニュソス的化身であると解釈可能ではないか。

だが、それだけではない。ここで確認された詩人存在としての人間、いわば祖国の祝祭を望むミクロコスモスの内的要望は、時間と空間一切の次元を司る父なるエーテル、すなわちマクロコスモスへとつながっているのである。

b) 父なるエーテル——乏しき時代に何のための詩人であるのか

「シュトゥットガルト」全体に時空を表出する語は頻出している。殊に「時」を刻む言葉のなかで一日と四季とは二重写しにされて黄昏ゆく「今」(V. 3, 7, 27, 27, 28) を強調している。だが、「この沈みゆく時」(V. 38) また「夜が訪れる！」(V. 97) として表出される「今」とは、一体いつのことであるか。同時期に詩作された悲歌「パンと葡萄酒」の有名な第7詩節を参照したい。

だが友よ！我等は来ることがあまりに遅かったのだ。もとより神々は生きてはいる、
しかしそれは我等が頭上　はるか別世界においてのことなのだ。
そこで神々は無限の働きを続けている […] (StA. II. 93. V. 109-111)

「今」とは、神々の立ち去りし「聖なる夜」であること、すなわち、かつての黄金時代はすでに過ぎ去り、それがいつしか再び回帰してくるまでの「中間時」(Zwischenzeit)⁽³⁰⁾であることが明かされる。そのような乏しき「時」のなかで何のための詩人であるのか、同詩節を次の詩句が結ぶ。

けれども詩人とは、そうおんみは言う、聖なる夜に
国から国へとめぐり歩いた酒神の聖なる司祭たちに等しいのだ。
(StA. II. 94. V. 123-124)

「司祭」の語は「宗教」及び「新しき神話」を想起させる⁽³¹⁾。こうした「詩人の使命」感に基づく「新しき神話」を悲歌「シュトゥットガルト」に即して考察するならば、頻出する「時」のモチーフは現在を生きる詩人と交錯して、この「祖国」(V. 29, 91)の枠組みのなかで「先祖」や「子孫」をも伴った一つの「家族」の形態を構築していることに気付くであろう。また、同時期(1800)に詩作された「祖父の肖像」や「永眠した人々」、「ラングウアーに寄す」においても「家族」のモチーフは主題的に扱われ、「時」との連関のうらに考察されている。シュトゥットガルト期のヘルダーリンが、孤立した自らの存在に対して、理想的な「家族」の調和的秩序に関心を寄せていたであろうことは疑い得ない。「シュトゥットガルト」における「家族」像ならびに「詩人の使命」を追って説明したい。まず、詩の構造全体の中心部にて次の詩句が目につく。

やはり過去は、未来と等しく、歌人には神聖であるのだ、
そしてこの秋の日々ともなれば我らは影の国に住む人々とも親しく睦
びあうのだ。(V. 53-54)

この箴言的な箇所は後に続く「大いなる生成だ、見渡す限り」(V. 59)
の語に要約されよう。即ち、この中間部における詩人とシュミットとの散
策をめぐり、「時」は過去から未来へ経過してゆくと考えられる。すると
かつて祖国を切り拓いた中世の「英雄たち」(V. 49)は詩人の「先祖」と
して、すでに過ぎ去った黄金時代を表出していることが明かされる。また
同様に山々から生まれ出づる小川、「若者たち」(V. 60)は来たるべき黄
金時代として、最終詩行にて初めて名指される「子孫」(V. 108)のヴィ
ジョンをあらかじめ詩的に表出したものと考えられる。しかしながらこの
歴史哲学的な「家族」の形態のなかで、現在を生きる詩人が担うべき機能
とは何であるか。ここではヘルダーリンの唱える「詩人の使命」を、「息
子としての詩人」と「時」を司る「父なるエーテル」との接点のもとに考
察してみたい。

悲歌「さすらい人」のなかで「祖国の父、威力あるエーテル」は、「大
地」や「光」とともに一なる三つのものと呼ばれている(StA. II. 83. V.
97-102)。「シュトゥットガルト」においても、詩人は友との「さすらい」
を経て、自分自身の「父」(V. 46)から「エーテル」(V. 56)さらに「天
上の父たち」(V. 89)へとその父性的なものに対する視点を高めてゆく。
しかしこの「時」を超える「散策」のなかで描出される「現在」の箇所に
おいては、次の詩句が目につくのである。

このようにして強大なる者たちを想え また心を高める運命のこ
とを、

自らは行為なき者、乏しき身に過ぎないが、しかし我らもまたあのエ
ーテルにより

見守られ 敬虔であることは、あの古代の者たち、神々によって養わ

れた

喜ばしき詩人たちとなんら変わりはないのだ 喜ばしく国土をのぼ
ってゆこう。(V. 55-58)

この中間部において過去に君臨した「祖国の英雄たち」、また未来に国土を耕す「小川たち」は等しく「行為者」として位置づけられる。それに対し現在を生きる詩人は「行為なき者」(Thatlos) また「乏しき身」(leicht) であることが言われる。すでに指摘された神々不在の「時」にあって、詩人はしかしながらなお「祖国」の基盤とも言うべき「父なるエーテル」の「息子」(V. 79) として見守られることにより敬虔であり得る。故に、古代詩人とも等しく「喜ばしき」存在として、詩人は国土について語りその動静を未来に伝えゆくことが出来るのである。即ち、詩人とは過去と現在を媒介する行為の「保管者」(Bewahrer)⁽³²⁾としての機能を担っている。

さらに作品の経過において過去の「行為者」、現在の行為なき「保管者」に対し、両者を超克した来たるべき存在としての「天使たち」(V. 91) の出現が待望される。終結部にて初めて名指されるこの「天使たち」は、しかし冒頭部の「小鳥たち」とイメージ的に結び付き作品のなかで円環構造を成す。またその語感 (Engel) は、最終詩行 (V. 108) にて現る来たるべき「子孫」(Enkel) の名をも暗示していよう。さらに現在の乏しき「夜」の時代に待望されるこの「天使たち」とは、「さすらい人」において「エーテル」と「大地」を媒介するものと呼ばれている「光」をも想起させよう。ヴァクヴィッツ的解釈によれば、「喜ばしき」ディオニュソスとして詩人は、最終的に「祝祭」を通じて過去と現在を媒介してこの「天使たち」を地上へと召喚すること、即ち、来たるべき黄金時代を詩の現在において神話的に読者に提示することをその使命としているのである。

こうして「乏しき時代」において何のための詩人であるのか、その機能がマクロコスモスとの連関からも考察された。またここでは主に「時間」の見地から「家族」の形態が扱われた。次には本作品において現出する

「空間」が、即ち本論の中心課題である「庭園」こそが問われなければならないまい。

c) 母なる大地——メゾコスモスとしての庭園都市

本作品の「空間」を冒頭部、中間部、終結部にそれぞれ分けて考察する。その際「家族」の形態を支える「庭園」は天と地を結ぶヴィジョンで描出されていることに注目されたい。周知のように当時の「庭園」は統治者が理想とする政治形態を表出する場所であるとされた。また、ガルディニーは『エムペドクレス』の自然像のなかで最も印象深いモチーフとして「庭園」を挙げ、さらにヘルダーリンにおける「庭園」=「故郷」(Heimat)の構図を提示している⁽³³⁾。「シュトゥットガルト」においても「庭園」は、理想的な共同体のヴィジョンを表出するとともに、乏しき近代における詩人の存在の地盤として、「故郷」の性格をも帯びているように思える。

「ふたたび訪れた、幸福は。」(V. 1) この詩句をもって始まる第1詩節では「広間」(V. 3)「庭園」(V. 3)「峡谷」(V. 4)が都市のヴィジョンとして現出する。これらは皆「開かれた」(V. 3)ところとして天と地を宥和させる「歌の国」となる。「祝祭」が準備される。第2詩節においては初めて「祖国」(V. 29)が名指され、大地に根差した共同体のヴィジョンが「祝祭の炎」(V. 30)及び蜜蜂のめぐる「樅の樹」(V. 34)最後に民の「合唱」(V. 36)として現出する。これらは皆ディオニュソスを想起させ⁽³⁴⁾、大地から天へと上昇してゆく機能を担う。さらにシュトゥットガルトが「歌人の都市」としてのトポスを帯びていることに注目したい。

続く中間部において詩人とシュミットは再会し、二人の「散策」が開始される。その起点は「祖国の境」(V. 39)の地ラウフェンであり、これがいわば敷居として都市の北方の境界を規定する⁽³⁵⁾。また同様に、「最も奥に連なる山々」(V. 59)とは南方の敷居を意味しよう。即ち、ここで明確に仕切られたことにより同地は「祝祭」の地としての機能を担い、北方からは詩友シュミットを、南方からは「イタリアの風」(V. 65)「雲」(V.

66)「輝かしい陽光」(V. 66)をそれぞれに敷居を越えて来た客人として迎え入れることとなる。このディオニュソスの「祝祭」においては、無論両者の融和が構想されている。

さらに詩人とシュミットの「さすらい」はシラーの悲歌「散策」(1795)を想起させる。またシラーの「散策」がヘルダーリンの詩想に刺激を与えたであろうことは、G. ミートやU. ガイアーが指摘するところでもある⁽³⁶⁾。「シュトゥットガルト」とも類縁性を持つように思われる「散策」執筆期のシラーの「庭園」記述を二点、次に指摘しておきたい。

まず第一に、シラーは「散策」執筆期にシュトゥットガルト商人ゴットロープ・ハインリヒ・ラップ(1761-1832)の著述「ホーエンハイムの庭園描写」(1794)の書評(1795)を物している⁽³⁷⁾。シラーは1793/94年の故国ヴュルテムベルクへの帰郷時には、「庭園」をめぐる実際にラップと議論を交わしていた。そしてシュトゥットガルトからホーエンハイムへ至る道筋は感性的な「自然」から出で、フランス式「文化」の庭園を経て、再び「自然」の庭園へと至る道程であると述べている⁽³⁸⁾。このような「庭園」をめぐる散策の記述と、同様の風景描写を経る悲歌「散策」とが著しい連関にあることは否めまい。さらに自然をめぐる歴史哲学観が、ヘルダーリンにも影響を及ぼしていると考える。

第二に指摘されてよいのが、「散策」と同時期に執筆された「素朴文学と情感文学について」(1795)からの影響であろう。シラーは失われた自然と理想の「庭園」(Arkadien)を悲哀の対象として表出する狭義の「悲歌」(Elegie)から、その両者を歓喜の対象として表出する来たるべき「庭園」(Elisium)へと読者をプログラムの的に導いてゆこうとする。即ち、彼は最も広い意味での近代詩のジャンル「牧歌」(Idylle)の創設を提案しているのである⁽³⁹⁾。そしてこの二つの「庭園」はヘルダーリンの「シュトゥットガルト」においても顕現している。

第3詩節の冒頭部(erste Distichentrias)にて、詩人の生誕の地として現れる「島」(V. 40)はまた過ぎ去り失われゆく「奔流」(V. 40)のなかでとどまる「岩」(V. 41)として常に想起されるべき人類の幼年時代をも

暗示していよう。「聖なるものだ」(V. 41)と言われるこの地に顕現した「庭園」(V. 42)は「波間」(V. 42)から屹立して天と地を結び、失われた黄金時代を表出する。「そこにおいて我らは互いに再会する」(V. 43)の言が、「飲びの庭」「愛の庭」のトポスを想起させる。さらに「そこにおいて愛すべき生命ははじまった、いや新たにはじまろうとしている」(V. 45)、このように言われるに及び、この「庭園」が人類の失われたエデンの園、またシラーの唱えるアルカディアの園であることは疑い得ぬように思われる。

やがて友との時を超える「散策」を経て、第4詩節の終結部 (letzte Distichentrias) にて顕現するのが豊かな植物・穀物類とともに名指される「庭園」(V. 70)である。ここでは複数形で言われる (die Gärten)⁽⁴⁰⁾。これは無論、未来の「行為者」たる「小川たち」(V. 61) やその長「ネッカル河」(V. 64) によって打ち立てられるべきエリュジウムの園であろう。さらにこの「庭園」に生い茂る穀物や樹木が「さすらい人」(V. 72) を覆うほど豊かに生育していることに注目したい。来たるべき「庭園」がまたも天と地を結ぶヴィジョンを具現しているのみならず、ここでは「さすらい人」、即ち「詩人」の構想力をもはるかに上まわる豊かな繁栄ぶりを提示してこの中間部 (第3・4詩節) を結んでいる。この来たるべき「庭園」の成立をもって、詩人とシュミットとの時を超える「散策」(シラーに学んだ近代エレギー・プログラム) は終了に至るのである。

こうして終結部に至り、詩人は現時空における自己の存在の確固たる地盤シュトゥットガルトへの回帰を果たす。「父なるエーテル」の不在にあって「絶えずおんみ(「母なる大地」として同都市)は笛と弦の音に奏された歌を受け止めてくれた」(V. 81)。さらにこの「秋の祝祭」のディオニュソス(詩人)の巫女として同都市は「威儀あるその頭をもたげる」(V. 75-76)。即ち、ここに詩人の「歌」を媒介として、頻出する天と地の宥和されたヴィジョンを現時空におけるシュトゥットガルトが担うこととなる。またここに「家族」の形態として構想された三者は一つとなり、「庭園」としての同都市がこれを支える。しかしながらこの「歌人の都市」

は古代に代わる乏しき近代の「庭園」であるがゆえに、ここでは同時にディオニュソス（詩人）の「庭園」の姿で描出され「秋の祝祭」のうちに高められていることを確認したい。また、小鳥たちの「歌の国」（冒頭部）は「散策」（中間部）を経て、人間存在の共同体「シュトゥットガルト」（終結部）へと変容してゆくのである。即ち、今やこのように言ってよいのではないか、シュトゥットガルト（Stuttgart）とはシュトゥット-ガルテン（Stut-Garten；庭園）であると⁽⁴¹⁾。

最後に、このようなヘルダーリンの存在の確固たる地盤としての「庭園」を補足しておきたい。U. ガイアーは1988年度のヘルダーリン塔の講演にて、詩人の「庭園」を自然（Natur）と文化（Kunst）の織り成す原現象⁽⁴²⁾と位置つけた上で次のように考察してゆく。まず「庭園」とは1）詩人存在の立脚地であり、2）我々の興味深いことに、詩人をその実存的苦悩から救出かつ保護してくれる場所として官能的・母性的な機能を担うとともに、3）また詩想（靈感）を与えてくれる瞑想的な場所として精神的・父性的な意味合いをも帯びているという⁽⁴³⁾。上述の「家族」の形態はおのずと詩人の「庭園」のうちに顕現してくることとなろう。

さらにガイアーは、1800年以降にはヘルダーリンが詩人とは「民衆の教育者」⁽⁴⁴⁾であると同時にまた祖国という「広大な庭園」⁽⁴⁵⁾を培養してゆく「庭師のような」（gärtnerisch）存在であると位置づけていたことを推測する⁽⁴⁶⁾。このような「詩人」と「庭師」の等置は、殊に頌歌「我がもの」（1799）あたりから目につき、事実、同詩においては詩人の「歌」がまた「庭園」と等置されているのである。

おんみ、歌よ、住み心地のよい我がくれ家であってくれ！ おんみ、
幸恵む歌よ！ こまやかなる我が愛をもって
世話される、庭園であってくれ、[…]（StA. I. 307. V. 41-43）

このような記述は、詩人の歌「シュトゥットガルト」そのものが、とり

もなおさずいつの日にか祖国の大地に現前されるべき「庭園」であることを明らかとしよう。即ち、ヘルダーリンの歌そのものが自然と文化の織り成す原現象としてすでにメタ領域に属し、マクロコスモス（自然）とミクロコスモス（人間存在）の融合する、言わばメゾコスモス（Mezzokosmos）⁽⁴⁷⁾としての庭園都市を構築している、と言うべきである。このようなマクロとミクロの両次元の融和は、本詩の有する調和のとれた韻律型式にも顕現しているように思われる⁽⁴⁸⁾。こうして詩人の手から後世へと一篇の「歌」が遺された。この「歌」は、なるほど詩の現在においては「夢」（V. 106）であったかもしれない。しかしながら現在も古代の「プラトンの敬虔なる学園」⁽⁴⁹⁾さながらに議論や対話は交わされている、と言うべきである、この未来のドイツに構築されるべき庭園「シュトゥットガルト」をめぐる。

注

ヘルダーリンの作品からの引用は、原則的に Fr. バイスナー及び A. ベック校訂によるシュトゥットガルト版による。Friedrich Hölderlin. Sämtliche Werke. Hrsg. von Friedrich Beißner (Werk) und Adolf Beck (Briefe und Dokumente). 8Bd. Stuttgart 1943ff. 以下、この全集からの引用は“StA”と略記し、巻数をローマ数字で、ページ数をアラビア数字で示し、書簡やドキュメントについては資料番号を付記して引用する。また、ヘルダーリンの作品や書簡を翻訳する際には、手塚富雄他訳の『ヘルダーリン全集』全4巻河出書房新社 1966-69年を参考にし、本稿の解釈に即して語句を変えている。

- (1) Christoph Theodor Schwab: Hölderlin's Leben. In: Ders. (Hrsg.): Hölderlin Sämtliche Werke. 2Bd. Stuttgart und Tübingen 1846. Bd. 2. S. 263-333.
- (2) StA. VII 3. 234-245. 236. (Nr. 572.)
- (3) StA. II. 86-89. 87. 以下、「シュトゥットガルト」からの引用はすべて本文中に（V.）付きのアラビア数字で原詩の行数のみを記すこととする。
- (4) Cyrus Hamlin: Zur Einführung. In: Ders.: Hölderlin. Stuttgart. Tübingen 1970. S. 25-40.
- (5) この最終的な改稿に関しては、詩人の草稿をほぼ原寸大でファクシミ

- り化したフランクフルト版の全集を参照した。なお、フランクフルト版はシュトゥットガルト版全集の批判を前提としている。Friedrich Hölderlin. Sämtliche Werke. (Frankfurter Ausgabe [Abk. :FHA].) Hrsg. von Dietrich Eberhardt Sattler. Frankfurt a. M. 1975ff. Bd. 6. S. 181-201.
- (6) StA. VII 4. 29-34. 30. (Nr. 14.)
 - (7) Ebd.
 - (8) Ebd.
 - (9) 内藤克彦「シラーの詩論」『近代ドイツ抒情詩の展開』所収 (p. 572-596.) 同学社 1986. を参照。
 - (10) 友人ノイファーに宛てた書簡 (1799年7月3日, ホンブルクにて) においてヘルダーリンは自らのポエジー理論を詳述している。エレギーに言及した箇所は以下の通りである。「情感的な素材 (sentimentale Stoffe), 例えば愛は [...] 偶有性を敏感に回避しながら (mit dieser zarten Scheue des Accidentellen) 深く豊かな悲歌的 (elegisch) で深遠な音色において, またこれらの素材が表現している憧憬と希望とによって (durch das Sehnen und Hoffen) 印象深く響く音色において, 諧和しつつ (harmonisch) 転調して進行するのに, そして生に満ちている一全体の理想 (崇高) を [...] プシュケーとアモールのように翼に乗せて, 親密な (innig) 簡潔さをもって提示するのに全く適しているのだ。」StA. VI. 340. (Br. 183.) ここで情感的素材に帰属するであろうエレギーは, 必然的にまずは偶有的・感覚的なものから出発し, やがてはその憧憬と希望のうちに絶対的なもの (das Absolute) へと高められてゆくことが要請される。都市や個人の個別的名称を, ここで偶有的なものとの連関から考察することは可能であろう。
 - (11) StA. VII 2. 381-382. (Nr. 362. Leo von Seckendorf an Justinus Kerner)
 - (12) Friedrich Beißner : Deutung des elegischen Bruchstücks “Der Gang aufs Land”. In : Ders. :Hölderlin. Reden und Aufsätze. Köln ²1969. S. 126-143. Ders. : Geschichte der deutschen Elegie. Berlin ³1965. S. 172-190.
 - (13) Jochen Schmidt : Hölderlins Elegie “Brot und Wein”. Die Entwicklung des hymnischen Stils in der elegischen Dichtung. Berlin 1968. S. 16-33.
 - (14) Hamlin : a. a. O.
 - (15) Teruaki Takahashi : Die dichterische Welt Hölderlins. Eine hermeneutische Auslegung der Elegie “Stuttgart”. 学習院大学文学部『研究年報』21輯 1974. S. 247-338.

- (16) 高橋輝暁「ヘルダーリンの《シュトゥットガルト》における共同体のヴィジョン」『専修人文論集』21号 1978. S. 61-78.
- (17) Albrecht Seifert: Untersuchungen zu Hölderlins Pindar-Rezeption. München 1982. S. 377-387.
- (18) Stephan Wackwitz: Trauer und Utopie um 1800. Studien zu Hölderlins Elegienwerk. Stuttgart 1982. bes. S. 3-20.
- (19) Ebd. S. 182-203.
- (20) Rolf Zuberbühler: Die Sprache des Herzens. Hölderlins Widmungsdichtung. Göttingen 1982. bes. S. 75-90.
- (21) Fritz Martini: Hölderlin und Stuttgart. In: "O Fürstin der Heimat! Glückliches Stutgard". Politik, Kultur, und Gesellschaft im deutschen Südwesten um 1800. Hrsg. von Christoph Jamme und Otto Pöggeler. Stuttgart 1988. S. 204-226.
- (22) ランダウアー (Christian Landauer: 1769-1845) はシュトゥットガルトの富裕な毛織物商で文学・芸術を愛し、シュトゥットガルト期のヘルダーリンは彼の家に食事付きの下宿人として支払額を定めて住んでいた。また彼の家はシュトゥットガルトでの文学・芸術を愛する知名人たちの一センターになっていたという。
- (23) Bernhard Böschenstein: Stutgard. Dionysische Wanderung im Zeichen von Freundschaft, Dichterberuf, politischer Utopie. In: Interpretationen. Gedichte von Friedrich Hölderlin. Hrsg. von Gerhard Kurz. Stuttgart 1996. S. 142-152.
- (24) この事をヘルダーリン自身が次に引用する断片のなかで一層明瞭に述べている。これはバイスナーによって後期讃歌「母なる大地に」(1800)の最終部分のための試稿と推定されており、所々空白部分が残され未完のままに放棄された草稿の一部である。

そして見よ、わたしには偉大なる父が次のように語るのを聞く思いがする、
 今より誉れを汝（母なる大地）が担い、そして
 歌を我が名において汝が受け止めるがよい、
 そして我が遠きにありて 古よりの永遠が
 ますますその姿を隠そうとする間は、
 死すべき人間たちのために 我が務めを汝が果たせ、[...] (StA. II. 683f.)

- (25) ギリシア神話におけるガイアは大地の女神として永遠の命を保持して

- いる。男性神がウラノス、クロノス、ゼウスと次々に世代交替しても彼女は変わらぬ若さでその生産性を維持する。また藤縄謙三の『ギリシア神話の世界観』（新潮選書 1971. S. 77f.）によれば「ガイアが神々の根源である」とされたのはヘシオドス以来のことであるが、すでに詩人として「言葉」（表現）や「神話」（素材）の問題には深く関心を寄せていたであろうシュティフト時代のヘルダーリンが1790年にテュービンゲン大学に提出した学位論文もヘシオドスに関する試論であった。（“Parallele zwischen Salomons Sprüchwörtern und Hesiods Werken und Tagen”. StA. IV. 176-188.）
- (26) Bernhard Böschstein: Zu Hölderlins Dionysos-Bild. In:Ders.: “Frucht des Gewitters”. Hölderlins Dionysos als Gott der Revolution. Frankfurt a. M. 1989. S. 12-29.
- (27) StA. VI. 229. (Nr. 132. Brief an Johann Gottfried Ebel. Frankfurt a. M. 10. Jan. 1797.)
- (28) Vgl. Günter Mieth: An unsre großen Dichter. Hölderlin und die großen Dichter. In: Interpretationen. Gedichte von Friedrich Hölderlin. Hrsg von Gerhard Kurz. Stuttgart 1996. S. 48-58. S. 53. Auch Vgl. Böschstein, 1989: a. a. O. S. 21. またディオニュソス/バッカスをめぐっては18世紀末に最も活用された神話事典 Benjamin Hederich: Gründliches Mythologisches Lexikon. Darmstadt 1967. Sp. 501-522. 及びカール・ケレーニイ/植田兼義訳『ギリシアの神話—神々の時代』中公文庫1985. S. 312-345. を参照。
- (29) Böschstein, 1989: a. a. O. S. 16. und S. 25f.
- (30) 「中間時」(Zwischenzeit)とは元来、キリスト教神学の述語であり、キリストの復活・昇天と将来の来臨の間の時を意味する。ヘルダーリンに関して言われる場合は、過去の「ギリシアの神々の逃げ去り」と未来の神々の再来との間の現在の時を意味し、彼はこの時代を「聖なる夜」とも呼んでいる。
- (31) フランクフルト＝ホンブルク・サークル期のヘルダーリンが関与していると考えられる「ドイツ観念論最古の体系プログラム」(1796/97)においてすでに、「詩が人類の教師となる」べきこと、また「大衆が感性的宗教を有するべきであること」は論述されている。Vgl. StA. IV. 297-299. 298.
- (32) Hamlin:a. a. O. S. 34. ハムリンは、かつて行為を成した「英雄たち」(Heroen)と現在の行為の「保管者」(Bewahrer)としての「詩人たち」とを対置して考察している。また、同様の指摘をツァーバビュラーも行っている。Zuberbühler: a. a. O. S. 84f.

- (33) Vgl. Romano Guardini: Hölderlin. Weltbild und Frömmigkeit. München 1955. S. 461f.
- (34) Vgl. Takahashi: a. a. O. S. 262-274.
- (35) オギュスタン・ベルクは西洋の都市創設にとって本質的なものであったふたつの次元として、1) 創設者たる長を前提とする呪術的・宗教的次元と 2) 住民の間の政治的つながりを前提とする共同体的次元とを挙げている。殊に前者に属する「都市の象徴的な境界線」は、ロムルス的事蹟によるローマ建国の神話以来、ヨーロッパ人の都市に対する感受性を常に規定してきた。オギュスタン・ベルク/篠田勝英訳『都市のコスモロジー—日・米・欧都市比較』講談社現代新書 1993 S. 139ff. を参照。
- (36) Vgl. Günter Mieth: Friedrich Schillers “Spaziergang” eine Anregung für Hölderlins poetische Aneignung der Antike? In: Turm-Vorträge. 1987/88. Hölderlin und die Griechenland. Hrsg. von Valérie Lawitschka. Tübingen. S. 44-53. Und auch vgl. Ulrich Gaier: Hölderlin. Eine Einführung. Tübingen und Basel 1993. S. 255f. und S. 400f.
- (37) Schillers Werke. Nationalausgabe [Abk.: NA]. Bd. 22. Hrsg. von Julius Petersen und Hermann Schneider. Weimar 1958. S. 285-292. (“Über den Gartenkalender auf das Jahr 1795”)
- (38) NA. Bd. 22. S. 290f.
- (39) NA. Bd. 20. Hrsg. von Benno von Wiese. Weimar 1962. S. 448f. und S. 472.
- (40) 同様にエレギー詩型にて詩作された「メノーンのディオティーマ哀悼歌」(1800)の最終部分(V. 123-130)においても、やがて二人が再会する場所とされる「庭園」(V. 128)は複数形で言われる。StA. II. 79. なお同詩の初稿である「エレギー」(1799)の最終部分(V. 111-116)においては、まだ「庭園」の語も「共通の地盤」(V. 123)の語も現れてはいない。StA. II. 74. 即ち、ギリシア神話において死者の国とされる「至福の島々」(V. 111)から「共通の地盤」とされる現世の「庭園」へと改稿は行われたことになる。これはエレギー期のヘルダーリンの庭園観を考察するうえでも興味深い資料である。「庭園」が現世における祝祭性を担うのである。
- (41) 後に手を加えられた別稿によれば、この終結部の第84詩行「それゆえにまたおんみは歌人の心をも好んで喜ばせるのだ。」は次のように改作されている。「また庭園が好意をもって君主の心を喜ばせるのだ。」FHA. Bd. 6. S. 201. ここで「おんみ(シュトゥットガルト)」から「庭園」への書き換えが行われていることに注目した。しかも一行全てが

改稿されているのは、第5詩節においてはこの箇所のみなのである。詩人がここで「庭園」の語に留意したであろうことは疑い得ない。さらにグリムのドイツ語辞典によれば Stuttgart とは元来 Stutgarten 即ち, Stute (成熟した雌馬) の Garten 及び Gehege (飼育用かこい地) であったこと, Gestüt (種馬飼育場) であったことが記述されている。Deutsches Wörterbuch von Jacob und Wilhelm Grimm. 10. Bd. IV. Abteilung. Leipzig 1942. Sp. 733. それ故にシュトゥットガルトは元来「庭園」のトポスを帯びていると考える。また Stute とはギリシア神話において雌馬に姿を変えポセイドンと交わったデメテルを想起させる。そしてディオニソスはまたエレウシスにおけるデメテルの聖域の支配者でもあったのだ。Vgl. Beschenstein, 1989: a. a. O. S. 23. よってシュトゥットガルトとはまたデメテル (大地・母, 収穫の女神) の聖域をも意味していると考えすることは可能であろう。だが無論このような解釈は筆者の恣意的な想像の枠を越え出るものではない。

- (42) このようなヘルダーリンの思考は、例えば「自然と技巧——あるいはサトゥルヌスとユピテル」(1801)において顕著に描出される。StA. II. 37-38. ("Natur und Kunst oder Saturn und Jupiter") Dazu auch vgl. Ulrich Gaier: Natur und Kunst oder Saturn und Jupiter. Hölderlins Ode über die Mythologie. In: Interpretationen. Gedichte von Friedrich Hölderlin. Hrsg. von Gerhard Kurz. Stuttgart 1996. S. 124-141. bes. S. 139.
- (43) Vgl. Ulrich Gaier: Hölderlins Gärten. In: Turm-Vorträge. 1987/88. Hölderlin und die Griechen. Hrsg. von Valérie Lawitschka. Tübingen. S. 54-97. S. 61.
- (44) StA. III. 89. "Erzieher unsers Volks"
- (45) StA. II. 3. "Den weiten Garten"; V. 15. ("Gesang des Deutschen")
- (46) Gaier, 1988: a. a. O. S. 63f.
- (47) オギュスタン・ベルクは現前する自然をマクロコスモス (大宇宙) と呼び、居住する個体をミクロコスモス (小宇宙) として、その中間に位置する都市の領域をメゾコスモス (中宇宙) として位置づけている。また J. シュミットは、ヘルダーリンの古代ギリシアへの飽くなき追想を決定づけたものとしてポリス (共同体) の存在を強調しているが、エレギー「シュトゥットガルト」においても理想の共同体樹立の基盤として都市領域は意味を持つ。この都市領域が自然と文化 (歌人たち) の織り成す「庭園」として表出されているのである。よって、オギュスタン・ベルクの「メゾコスモス」の語彙は、ヘルダーリンのシュトゥットガルトの「庭園」を規定するうえでも有効であると考えた。オ

ギュスタン・ベルク/篠田勝英訳『日本の風景・西欧の景観—そして造景の時代』講談社現代新書 1990 S. 150. Und vgl. Jochen Schmidt: Griechenland als Ideal und Utopie bei Winckelmann, Goethe und Hölderlin. In :Hölderlin Jahrbuch. Bd. 28 (1992/93). S. 94-110.

- (48) 本詩は Hexameter と Pentameter との組み合わせから成る2行のまとまり Distichon を三回繰り返した Distichentrias を内容的なまとまりの最小単位とする。そして各詩節は Distichentrias を三回繰り返して成り立つ。さらに作品全体の構成は各二詩節の三つごとのまとまりから成り、それが最大の単位を構築している。よって「シュトゥットガルト」においては構造的にも、マクロとミクロの両単位は厳密に照応している。Vgl. Hamlin: a. a. O. S. 36f.
- (49) StA. II. 4. “Platons frommer Garten”; V. 29. (“Gesang des Deutschen”)